

# 渡台の回顧

川上 達治 一郎

和同会雑誌四十六号  
明治四十三年七月刊

僕は三十二年八月六日台湾の基隆に上陸した。今年で満十年の昔となった、その頃の台湾は未だ世間の人に知られて居ない時で、内地で飯の食える人は台湾あたりに行かなくも宜しいと云う考えは誰にもあつた。僕もその考えの一人であつたが、その当時僕は飯の問題よりもっと重い問題の解決の爲渡台した。即ち僕の死を直ちに危殆の幾も多い台湾で決定しようとする考へで、換言すれば生還を期さないは勿論、僕の不幸の種痘を早く決定せんと考へて渡台した。

嗚呼、渡台して茲に十年、この間僕は死なずに居るのみならず、身体は益々壮健に蘇聯も少なからず得、一家の基礎もどうやら固まつて来た。即ち僕の不幸の種痘は渡台後でなく渡台前であつたことが判つた。併し今から渡台當時を思えば、僕の覚気込みはなかなか盛んなものであつた。世の中に快死の心ほど強いものはない。土著も生醫も種痘の事も少しも怖しくない。況や衣食住の不便不便の知きは意に介せないのみならず、或る点迄は却つて愉快に感じた。即ち危険を冒して水害地の探検やら、台湾から台北迄の縦貫旅行やら、牡丹社付近の社遊やら、その当時寧ろ愉快に思つて快行した。

僕が何故快死渡台したかと云うと、僕は二十七年に助産師で医者になり手を勤告された。

僕は商科で長生きするよりは實士の土産に學問したいと思つて、勤告を用いず始學を継続したが自分の死期はなかなか来ない。翌年に父が急病で倒れた。これは非常に僕を失望落胆せしめた。兄が色々慰勞して呉れた爲、學問は尚継続したが、身体は強壯でない。三十一年に著く学校生活を終り、妻帯して社会的生活に一步を踏み出した。その頃母が重病で僕は再三度探病した。三十二年に長男が出来て間もなく、妻が死亡し長男が又重病にかかり、大學病院に入院した。その内に徴兵検査を受ける期日が来た僕は、これ等の爲しばしば探病を余儀なくされた。上官は僕を職務に不熱心のものと同様して降職を迫つた。僕は一々弁解する必要もないと思つて強く降職した。その中に僕は病身の上に脚氣にかゝつた。無論野食は一文もない。斯かる次第から女々しくも何故斯く色々困窮が集まるものかと疑つた位だ。

運き事の上にも僕もれかし限りある身の心ためさん

との古人の歌に感服し、僕の一身の力量を試験し、運命を運決せんと決心を起こし、遂に渡台と決した。

母は重病、長男も重病、自分は平素の病身の上に脚氣である上に渡台するのだから、勿論生還は期さない。只一度兄に逢つて、自分だけ永別の思ひを果したいとの考へから、電報で兄に上京を促した。親切なる兄は多忙の業務を捨てて上京した。僕に母の身の上も自分の長男のことも、渡台後万一の時の自分の身の上も、若兄が始末して呉れるることを心中で願ひ且つ信じ、安心して快死の生活に向つた。この時の心中を兄が察して呉れたか否やは僕には説明が出来ぬが、僕だけは脚氣と安心とを得て出発した。

僕がこの決死舞台した瞬間に、僕の不幸の運命は幸福の運命に変わったのだ。否、僕の精神上に一大革新を得た。総ての困難はこの革新された僕の精神には困難と感じなくなつた。僕が舞台後十年の間は多少の進歩をなし、重大の事業を担任して居るに至つたのも、実にその根源は精神的革新の賜である。

「解説」川上治二郎の台湾赴任は少壮技師の順風満帆たる門出ではなかつた。その事情を治二郎みずから記述したこの回顧は、まことに貴重な記録といつていいだろう。治二郎を襲つた幾多の不幸をもう一度この記述に合わせて整理してみよう。

明治二十七年 助産院に罹り、既者より勉学中止を勧告される(一高時代)。

二十八年 二月三日、父喜右衛門死去、享年五十六才。

三十一年 春、小林伝作の二女きよと結婚。

(小林伝作は越後に最初に節米織を取り入れた長岡の実業家、明治維新後の樹尾はこの節米織産地として格況を取り戻し、その経済興隆がやがて喜右衛門らによる樹尾銀行創設の下地となる)

三十一年 春、母が病気で倒れる。

三十一年 七月、東京帝國大学工科大学土木工学科卒業。

三十二年 四月二十九日、長男洋一誕生。

三十二年 五月四日、妻きよ死去、享年二十才。

長男洋一が大学病院に入院。

三十二年 八月六日、台湾の基隆に渡る。

三十三年 四月十六日、母とし死去、享年五十五才。

(としは樹尾村植村新助の長女、実家は新助の父寛左衛門の安藤)

○先妻きよを亡くした頃のことを治二郎の妹ソウは次のように記している。

「きよは洋一さんの実母、小林伝作氏の娘にて、川上治二郎の妻となり、洋一さんを産み三日目(本母は四日目)に産褥熱にて死去さる。当時兄治二郎は福岡の鉄道技師、勤務中にて男子出産の知らせを聞き、ようよう休暇を頂き東京の小林家に行けば、妻は死去の故、郷里の小向川上家に待参す。小向川上家では母病床、ソウが学校を休みて看護中に次兄降る。姉の御骨をいできて……母に知らせぬ事なれど、お経を上げるのを不思議と思つてソウは聞かれしも、事実を言う事を止められている為に、話出来ず、母の心中を察し、兄の悲しみを思いやりて涙はいつしか流れて、どうする事も出来ざりし。明治三十二年五月四日命日 川上きよ 二十才。